

キーワード：

コラージュ・シティ
リノベーション (再生)
コンバージョン (転用)
近代化遺産
都市デザイン

抄録

都市デザイン史に関する前著から展開し、前著で引用した『コラージュ・シティ』を再読して現時点での関心を確認した後、そこで示された、異なる形態=時間の共存という概念の実現として、近代化遺産の再生、転用の事例と現代的意義を述べる。特に近年の転機となったテート・モダンの事例を中心とする。

1. はじめに

筆者は相田武文と共著で、1996年12月に『都市デザインの系譜』を鹿島出版会から上梓した¹⁾。それから20年が経過し、筆者は常葉大学での「近代デザイン史」「景観論」において、この本をテキストとしながら、その続章を書くとしたらどのようなようになるであろうかと考えてきた。本稿はその試みである。まず前著でまとめとして引用した『コラージュ・シティ』を再読して現時点での関心を確認した後、そこで示された概念が実現しているのが、リノベーション (再生)、コンバージョン (転用) においてであることを考えたい。建築物の再生、転用は、近年、世界的な高まりを見せており、特に大規模な施設も多い近代化遺産においては、単体の建築物にとどまらず、都市的なスケールの計画となり、都市そのものの再生につながっているケースがある。

前著『都市デザインの系譜』は、大学等における都市デザイン分野のイントロダクションとして、基礎的な歴史的事項を概括する入門書、一般教養書として企図した。その構成はギリシャ、ローマ以来の欧米の建築史、都市史において、都市デザインに功績を残した15人を各章にあて、彼らの思想や業績を通史的に見たものであった。その15人は次の通りである。

- 1 ベリクレス
- 2 カエサル
- 3 ブルネレスキ
- 4 シクストゥス五世
- 5 ルイー四世
- 6 オースマン
- 7 ハワード
- 8 ガルニエ
- 9 ル・コルビュジェ
- 10 ロックフェラー・ジュニア
- 11 リンチ
- 12 ヴェンチャーリ

13 アレグザンダー

14 ロウ

15 チュミ

このうち、1-5が古代から近世まで、6,7が近代初頭、8-10が第二次世界大戦前、11-15が戦後と区分できる。全体の2/3が近代を扱っており、このうち9-11がモダニズム全盛期、12,13がポストモダン期であり、14は建築史家による書物を扱って全体のまとめとし、15は出版時に最新と思われた建築家を扱っていた。

2. 『コラージュ・シティ』再読

『都市デザインの系譜』14章では、建築史家コーリン・ロウとフレッド・コッターによって1978年に書かれた『コラージュ・シティ』²⁾を取り上げたが、この本的一端を解説することを通して、筆者の関心を代弁する意図であった。この本は筆者にとって、この分野で最も興味深く、信頼できる書物であり、現在もその思いは変わっていない。

図と地、ソリッドとヴォイド

『コラージュ・シティ』では、モダニズム期を代表するル・コルビュジェの計画について、建築空間における魅力と同時に、都市計画における非都市性を論じている。アンビバレンツともいうべきふたつの異なる方向性は、一方はル・コルビュジェ自身が「建築的プロムナード」と呼ぶ、住宅設計における人間の行動をもとにした細やかなプランに、もう一方はパリの都心部に高層集合住宅を並べる「ヴォワザン計画」のような非人間的なスケールの誇大妄想的都市計画に現れている。『コラージュ・シティ』では、ル・コルビュジェの都市に対する態度を、図と地、あるいは整形のソリッドとヴォイドという図式によって明らかにしている。そこではル・コルビュジェの案と対比して、以下のような例が配置図、平面図によって示されている。

¹⁾ 相田武文、土屋和男『都市デザインの系譜』鹿島出版会、1996

²⁾ コーリン・ロウ、フレッド・コッター、渡辺真理訳『コラージュ・シティ』鹿島出版会、1992 (新装版は2009)

(前者がル・コルビュジェの計画、後者が対比的に示される例)³⁾。

1. サン・ディエ計画／パルマ (イタリアの伝統的都市)
2. ユニテ・ダビタシオン (1952)／フィレンツェのウフィッツィ (1580) (図 1, 2)
3. ソヴィエト・パレス計画 (1931)／オーギュスト・ペレによる同計画
4. ヴォワザン計画 (1925)／グンナール・アスプルンドによるストックホルム王立事務局計画 (1922)
5. ヴィラ・サヴォワ (1931)／パリのオテル・ド・ボーヴェ (1655) (図 3, 4, 5, 6)

1では、ル・コルビュジェのモダニズム都市計画がヨーロッパの伝統的都市構造と対比される。前者では図である建物が地である敷地のなかに散在し、後者では密度の高い建物が連続して整形の空地を取り囲み広場を形成する。前者は建物への採光、通風が良好で衛生的であるが、都市空間への親密さでは圧倒的に後者が勝る。両者は、図の黒と地の白が、ちょうど反転したような関係となる。

2では、細長く四角い形状が、前者では建物として、後者では建物に挟まれた空地として対比される。前者では建物を整形に、後者では空地を整形にしようとする意図が明らかである。前者は都市郊外に単独で立つ(フリースタANDING)のに対し、後者は都市中心部で他の建物と隣接して形成される。

3では、同じ設計競技での異なる案を示している。前者は敷地中央の軸線上に連続して建物を配置するのに対し、後者は敷地両側に配置された建物が中央の整形の空地を囲んでいる。

4では、同時代のヨーロッパにおける異なる計画を示している。前者がパリの市街地を一度更地にして既存都市とは全く無関係な形状の集合住宅を並べる計画に対して、後者では既存の路地と建物がつくる筋状の形状を新たな計画でも踏襲している。

5では、立地の異なるふたつの住宅における外形と中庭に注目している。前者はパリ郊外の広々とした敷地に単独で立ち、四角い白い箱がピロティで持ち上げられた、近代建築史上最も有名な住宅である。外形はきわめて明瞭な形状をしており、その内部に変形のテラスを内包している。後者はパリ都心部の古くから建物が密集した敷地に立ち、外壁は道路側のファサードのみが見える。道路側の棟をトンネル状に潜って中庭に出ると、そこは奥に向かって狭まっているが整った空地である。前者はテラスの余裕が外形を整形することを調整しており、後者では狭い敷地の中でいかに整った中庭をつくり出すかを主題としている。前者がヴィラ、すなわち田園の別荘と呼ばれるのに対し、後者がオテル、すなわち都市住居と呼ばれるのも示唆的

である。後者と時代が近いヴィラ・ロトンダ(ヴィラ・アルメリコ・カブラ)を引き合いに出すのも一考である。ヴィラ・ロトンダは16世紀後半にアンドレア・パラディオがヴィチェンツァ近郊の田園に設計した別荘で、コーリン・ロウがヴィラ・サヴォワと比較した「理想的ヴィラの数学」は、遠く時代の離れたマネエリスム期と近代の著名な住宅の共通性を指摘したことで知られている⁴⁾。

時間の切断、モダニズムの問題

図と地、あるいは整形のソリッドとヴォイドという配置図、平面図の対比によって示されるのは、計画上、何が優先されているのか、ということである。ここに掲げられたル・コルビュジェの計画では、いずれも建築物単体の形状が優先されているのに対し、対比されるさまざまな例では、既存建物との連続性や既存都市の中でいかに公共的空地を確保するか、ということに力点が置かれている。つまり、これらを見る限りル・コルビュジェの計画では、既存都市との空間的、形態的な連続性が切れている、あるいは意図的に切断されているのであり、そうした考慮の必要のない単独で立つ敷地では傑作が生まれたというわけである。これを一步進めて、ル・コルビュジェに代表されるモダニズムの計画では、と敷衍しても、概ね妥当なように思われる。先の例にもあるように、モダニズム期であっても、そうした例ばかりではないのは明らかだが、モダニズムの代表作として挙げられるのは、圧倒的に単独で立つ建物が多い。

既存都市との空間的、形態的な連続性が切れているということは、とりもなおさず、時間的な連続性が切れているということに他ならない。既存都市は多くの場合、数百年の時間をかけて形成されており、それとの空間的、形態的な連続性を考慮しないということは、時間的、歴史的な連続性を遮断することを意味する。この時間的な連続性の欠如こそモダニズムの決定的な問題であり、この時間概念に立つ限り建設の竣工時が最高の状態であり、その後は価値が下がるという結果を招く。都市という長い時間の流れの中に、ひとつの建物を挿入することによって、過去および未来にわたる都市デザイン的な対話を生みだすことが、モダニズム以後の都市建築に求められたと言ってよいだろう。

形態の積層、時間の積層としての都市

『コラージュ・シティ』では、図と地、ソリッドとヴォイドの様々な対比を挙げた後、代表的なモデルとして、次を挙げる⁵⁾。

³⁾『コラージュ・シティ』第3章

⁴⁾ コーリン・ロウ、伊東豊雄、松永安光訳『マネエリスムと近代建築』彰国社、1981

⁵⁾『コラージュ・シティ』pp.135-137



図1 ユニテ・ダビタシオン（マルセイユ）
直方体の建物：整形のソリッド＝図



図5 オテル・ド・ボーヴェ（パリ）
古い街区のなかでファサードのみが見える



図2 ウフィッツィ（フィレンツェ）
直方体の空地：整形のヴォイド＝地

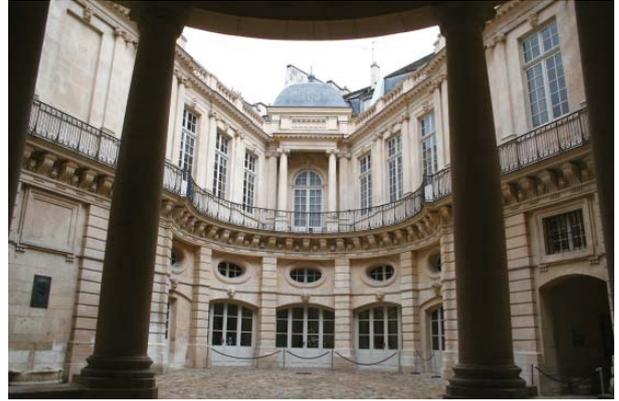


図6 オテル・ド・ボーヴェ
内包された整形の中庭：整形のヴォイド



図3 ヴィラ・サヴォワ（パリ郊外）
田園に浮かぶ白い箱：整形のソリッド



図7 アクロポリスのパルテノン（アテネ）
整形の建物：整形のソリッド＝図



図4 ヴィラ・サヴォワ
主室と連続する囲われたテラス



図8 フォルム（ローマ）のトラヤヌスのマーケット
整形に囲われた空地：整形のヴォイド＝地

アクロポリス／フォルム（図7,8）

すなわち、古代ギリシャの神殿域であるアクロポリスは、いくつかの建物がフリースタANDINGで存在し、建築が図であるのに対し、古代ローマの広場であるフォルムでは、整形の空地を列柱廊が取り囲み、地が浮き上がるようになっている。そして、古代ローマでは代々の皇帝が次々とフォルムをつくり、区切られた広場が歩みを増すごとに連続的に現れる都市空間が形成されていった。整形なヴォイドの間を様々な形態のソリッドが積層して埋める図と地であった。

ここで思い出されるのは、時代は下るが1784年にジャンバッティスタ・ノッリが描いたローマの地図である⁶⁾。そこでは建物が黒く図として、道路や広場が白く地として描かれているのだが、そればかりではなく、一般に不特定多数の人々が入り出ることができる教会、中庭などの平面図を描き込んでいる。すなわち、教会、中庭などの内部もまた、道路や広場と同じく白くなり、それらの構造体だけが建築の平面図と同様、黒く描かれるのである。この表現では、教会、中庭などの内部は道路や広場の連続、延長として見ることができ、公的領域なのである。ここにあるのは所有権と利用権がイコールでつながった都市のあり方ではなく、公的領域と私的領域が相互陥入する、図と地が均衡した空間なのである。

古代ローマの建築物は、過剰にと言ってよいほど頑強であったから、その後の長い時間の中でも、それらは完全に壊されることなく、転用され、増築され、あるいは部分が別の建物に再利用され、残りは断片として存在するという事態に至った。おそらくは壊す労力に比して、使ってしまった方がずっと合理的であったのだ。壊さずに使い続けた結果、古代の建築を骨格としながら、徐々に変形され、様々な時代の様々な形態が寄生した奇妙な派生物が生まれることになった。『都市デザインの系譜』14章において掲げたマルケルス劇場は、そうした転用、増築、再利用、断片化の最たる例である⁷⁾。古代ローマの劇場であったこの建物は、字義通りにこれを基礎として、上部に住宅（パラッツォ）を増築し、様々な形態を抱え込んで、まさしく形態＝時間の積層といった光景を呈している（図9,10）。

ローマでは他にも、ドミティアヌスの競技場の形状がそのまま広場になったナヴォナ広場（図11）、側面

の列柱がボルサ（証券取引所）のファサードとなっているハドリアヌスの神殿（図12）、ハドリアヌスの霊廟（マウソレウム）としてつくられながら中世には牢獄となり要塞ともなったカステル・サンタンジェロ（図13）、ミケランジェロがその一部をサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会に転用したディオクレティアヌスの浴場（図14）など、多くの古代の遺構がその後の改変、転用を経て、姿を変えて存続している。これらはその名前さえも、いつの時代の呼称を使えばいいか迷うほどである。こうした古代ローマ遺構の転用、増築は、ローマ帝国が支配下とした地域全般におよび、ルッカの円形闘技場の住居化などが代表的な例として知られている⁸⁾（図15）。そして最も大きく、最も複雑に展開したのがクロアチアのスプリットである。ここでは広大なディオクレティアヌスの宮殿全体が、旧市街の基礎そのものとなっていて、古代の断片が至る所に顔を出している（図16）。

また、ローマのサンタ・マリア・イン・トラステヴェレ（図17）、サンタ・マリア・イン・コスメディンなど中世の教会では、スポリアと呼ばれる古代ローマの石材の再利用が見られる。『都市デザインの系譜』4章においても、近世のローマ改造時に古代遺跡が石材供給地となっていたことを指摘したが、古代ローマの遺跡はその最初の役目を終えてから、長きにわたって後世の建築の文字通りの材料であったのである。このこともかつてのローマ帝国下では必ずと言ってよいほど見られ、スペイン、コルドバのメスキータではその創建時に途方もない数の円柱をスポリアによって調達したのである⁹⁾（図18）。

コラージュ・シティの理念

ローマで見られるような、異なる形態＝時間の共存こそ、ロウらがコラージュ・シティと呼んだもの＝状態であろう。彼らが「ブリコラージュ」を援用して支持するのは、「ありあわせ」を使い続け、新しい部分や機能が付加されるとき、古いものとの「つじつま合わせ」の面白さである¹⁰⁾。それは既存建物の転用や古材の再利用から生じる、奇妙で整理できない不整合を受け入れ、むしろ積極的に楽しむことである。

『コラージュ・シティ』は、その終盤で次のように

⁶⁾ このことについては、小沢明『「ボシェ」から「余白」へ都市居住とアーバニズムの諸相を追って』鹿島出版会、2011に詳しい。私事だが筆者は学部生時代に小沢先生の教えを受けており、同書の内容を出版の20年前に教示されていた。

⁷⁾ このことについては、加藤耕一『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』東京大学出版会、2017に詳しい。同書は西洋建築史を建物の再利用という観点から通史的に見た意欲作で、筆者はここから多数の示唆を受けた。

⁸⁾ このことについては、黒田泰介『ルッカー一八三八年 古代ローマ円形闘技場遺構の再生』アセテート、2006に詳しい。

⁹⁾ このことについては、伊藤喜彦「再利用・再解釈・再構成されるローマ コルドバ大モスクにおける円柱」『西洋中世研究』第7号、2015に詳しい。スポリアという概念は西洋建築史の枠組みを超えて、日本建築史にも応用可能であろうし、リサイクルという観点から現代的な示唆も含んでいると思われる。

¹⁰⁾ 「ありあわせ」は『コラージュ・シティ』におけるレヴィ＝ストロースの言葉の引用。「つじつま合わせ」は『都市デザインの系譜』でも取り上げた、ロバート・ヴェンチャーリ『建築の多様性と対立性』鹿島出版会、1982で示された概念。



図9 マルケルス劇場（ローマ）
古代の劇場を基礎として上部に住宅が増築された



図13 カステル・サンタンジェロ（ローマ）
ハドリアヌスの霊廟として創建され様々に転用された



図10 マルケルス劇場側面
劇場の列柱廊の上に住宅が層をなして載る



図14 ディオクレティアヌスの浴場（ローマ）
サンタ・マリア・デッリ・アンジェリの入口



図11 ナヴォナ広場（ローマ）
ドミティアヌス競技場の形状が細長い広場となった



図15 アンフィテアトロ広場（ルッカ）
円形闘技場の上部に住居が載る



図12 ハドリアヌス神殿の列柱と壁（ローマ）
ボルサ（証券取引所）のファサードとなっている



図16 ディオクレティアヌス宮殿の中庭（スプリット）
広大な宮殿全体が旧市街の基礎となっている

述べる。

「コラージュは、一般的に言って、世の中の余りものに着目し、その元のままの状態を保ちつつそれに品位をあたえ、日常性と思想性とを複合する手法であるので、ひとつの社会通念として、また社会通念に対する違反行為として、予想を裏切るような使われ方をする必要があるのである。それは手法としてはかなり強引なものであり、『一種の不協和音、異種のイメージの組合せ、あるいは似ても似つかぬ事物間に神秘的な類似性を発見すること』というサミュエル・ジョンソンのジョン・ダンの詩に対する批評とも通じるところがある。」¹¹⁾

ここで言われている「予想を裏切るような使われ方」は、建築物の再生、転用という観点からすれば、元の用途とは「似ても似つかぬ」使用である。その建築物は元の機能を失った「世の中の余りもの」であるが、それに異なる部分や機能を与えることによって新たな価値を創出すると読める。さらに、ここで引用されているサミュエル・ジョンソンの、別の言葉を次のように引く。

「機知というのはアイデアの予想せぬ結合であり、一見遠く隔たっているように見受けられるイメージの間に何か神秘的な関係を見出すことである。したがって、機知が吐露されるに際しては知識の蓄積すなわち、概念とともに保管された記憶が前提となる。それを想像力が選別し新しい組合せを構成するのである。」¹²⁾

再生、転用以前と以後の「一見遠く隔たっている」差異を楽しむには、その以前の姿が知られていることが前提であり、これは社会的に共有された記憶と言える。その記憶をもとに、想像の力によって、新しい姿と用途が生まれると解釈できないだろうか。再生、転用に携わる建築家の立場からすれば、以前の姿が推測できるように痕跡を残し、そこに操作を組み合わせることで古いものと新しいものとの出会いから価値を生み出すということになる。つまり、既存の建物や都市から出発し、その記憶に対して想像力によって新しい形態や活用法を編み出し適用させること、これがコラージュ・シティの理念であると読み取ることができよう。ここでは時間こそが建築を、物としても設計行為としても成立させる条件なのである。

リノベーション、コンバージョンへの注目

とはいえ、『コラージュ・シティ』では、ロウラの言うコラージュ・シティが実現した例が明確に挙げられているわけではなかった。最終部でパンテオンのオキュルス（目＝頂部に空いた穴）が挙げられているが、これは例と言うよりも、それを見上げる感覚、すなわち建築物が存在し続けることによって2000年前と同じ光を見ているという感覚を想起させる記憶装置であ

ることを示すためである。『コラージュ・シティ』ではローマをモデルとした、理想のあり方が示されているに過ぎず、現実の建物や都市における具体例は断片的に示されているにすぎなかった。

そこで『都市デザインの系譜』ではポンピドゥ・センターを掲げ、パリのマレ地区における古い街区との対比を述べたが、ここでは都市内での位置付けによって異なる形態＝時間の共存が実現されているものの、ポンピドゥ・センター自体は完全な新築であり、ひとつの建築物の中に時間の多層性が見られるわけではなかった。ところが、これを上梓した後、その後の建築の世界的な動向を考えると、新築ではなく、古い建物のリノベーション（再生）、コンバージョン（転用）が目され、新築よりもむしろ新しい価値を生み出す積極的な建築手法として評価されるようになってきた。そして、異なる形態＝時間の共存というコラージュ・シティの理念は、リノベーション、コンバージョンにおいてこそ、実現しているのではないかと思いがたつた。

リノベーション、コンバージョンが、建築家による創造的な行為として世界的に脚光を浴びた転機は、いつ、どこであったかと思ひ起こすと、ロンドンにおけるテート・モダンの建設であったように思われる。以下はいわば『都市デザインの系譜』16章である。

3. 近代化遺産の再生、転用

1995年、ロンドン。テムズ川南岸の発電所であった建物を、現代美術館にするプロジェクトが発表された。国際建築設計競技を勝ち抜いたのは、ヘルツォーク&ド・ムーロン。近代の巨大工場は再生、転用され、テムズ川に新たに架けられた橋とともに、2000年にテート・モダンとしてオープンした。このプロジェクトはロンドンに新たな軸線をつくりだし、人の流れを変えることになる都市デザインであった（図19、20）。

都市デザインとしてのテート・モダン

ヘルツォーク&ド・ムーロンは、スイスのジャック・ヘルツォークとピエール・ド・ムーロンの二人によるユニットである（以下、HdeMと略記）。1995年のコンペでは著名な建築家が参加し¹³⁾、世界的な注目を浴び、この当選によってHdeMは一躍有名になった。その当選案は、他の案に比べるときわめて地味で、建

¹³⁾ 『コンペに指名されたのは、安藤忠雄、デビッド・チップパーフィールド、ラファエル・モネオ、レム・コールハース、レンゾ・ピアノ、ヘルツォーク&ド・ムーロンであった。Rowan Moore and Raymund Ryan with Contributions by Adrian Hardwicke and Gavin Stamp, *BUILDING TATE MODERN HERZOG & DE MEURON TRANSFORMING GILES GILBERT SCOTT*, Tate Gallery Publishing, 2000

¹¹⁾ 『コラージュ・シティ』 p.223

¹²⁾ 『コラージュ・シティ』 p.223



図 17 サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ（ローマ）
古代ローマの石材を再利用した不揃いな柱と柱頭



図 18 メスキータ（コルドバ）
スポリアによって調達された初期部分の円柱群



図 19 テート・モダン（ロンドン）
テムズ南岸の発電所を再生、転用した現代美術館



図 20 テート・モダンに北岸のシティからアプローチ
できるミレニアム・ブリッジ



図 21 テート・モダンのタービン・ホール
床には傾斜がつき内外の出入りをスムーズにしている



図 22 テート・モダン上部に付されたガラスの箱から
対岸正面のセント・ポールを見る



図 23 セント・ポールとミレニアム・ブリッジを結ぶ
軸線



図 24 バタシー発電所（ロンドン）
旧発電所の再生を中心に大規模開発が進行中

物頂部にガラスの箱が載る以外、外観はほとんど何も変わっていないように見える。この建物の最大の特徴は、現状でもタービン・ホールと呼ばれている大空間である（図 21）。発電用タービンが置かれていたところで、150m を超す長さで 35m の高さを活かして様々な展示に対応できる。ここで HdeM は、恣意的なデザインを極力排除し、ニュートラルな展示空間に徹してデザインしたが、その大きさそのものが非日常的である。そして、この大空間こそ、発電所からの転用でなくては生み出されなかったものなのだ。この大空間を大きく改変することなく、中心に据えたことが、HdeM の勝因であったと考えられる。

もともとこの建物は、バンクサイド火力発電所の建て替えとして、ジル・ギルバート・スコットの設計で建てられ、1952 年に始動し 1959 年までに完成した¹⁴⁾。中央に煙突を持ち、左右対称に腕を伸ばしたような巨大な姿は、レンガの重厚な外壁と相まって、首都の川面に堂々とした暗い姿を投げかけていた。1981 年に閉鎖されてからは廃墟となり、取り壊しか保存かが議論されていたが、1994 年にテート・ギャラリーが、その広大な容積を活かして近現代美術専用の美術館として再生、転用することを決めた。ここにおいて、廃墟は遺産として価値観が転換され、よみがえることになったのである。

この場所は、テムズ川を挟んだ北側がロンドンの中心部、シティであり、ちょうど発電所の煙突がセント・ポールのドームと相対する位置になる。したがって、都市内での位置的、景観的なポテンシャルはきわめて高かったが、テムズ川が流れているために、近くても遠い場所となっていた。この問題を解決したのが、ミレニアム・ブリッジである（図 22）。旧発電所のコンベに続いて翌年に行われた歩行者専用橋のコンベでは、ノーマン・フォスターとアラップ社による案が当選し、ミレニアムの 2000 年に、テート・モダンのオープンに合わせて開通した。この橋とその着地点であるテート・モダンができたことにより、ロンドンにはセント・ポールから南に向かう新たな軸線が創出され、人々の動きが大きく変わった。セント・ポールからテムズ川までの短い区間では、軸線を視覚的にも通すように建物の改修が行われた（図 23）。旧発電所の再生、転用は、その巨大なスケールを活かした都市デザインであるとともに、既存市街地とのアクセスや眺望までも変える、総合的な都市戦略として位置付けられたのである。

テート・モダンの成功を見て、ロンドンでは今、次なる大プロジェクトが進行中である。バンクサイド発電所と同じ建築家のデザインで、数キロ上流の南岸に 1933 年、1955 年に建設されたバターシー石炭火力発

電所の再生、転用だ（図 24）。構造体の前後に 2 本煙突を上げる姿が 2 期にわたって同様につくられ、結果としてレンガの建物の隅に 4 本の煙突を上げる巨体となった。それは一度見たら忘れられない強烈な印象を残し、ロック・ミュージックのレコード・ジャケットなどにも使われてきた有名な姿ではあったが、これも長い間廃墟となっていた。それが近年文化財として認められるとともに、近代化遺産の再生、転用が、完全な新築よりも新たな価値を生むことが認識され、2012 年以降、旧発電所の建物を残しつつ、周辺に新築を含むオフィス、店舗、住居等をつくり出す再開発事業が開始されている。この再開発はラファエル・ヴィニョリのマスター・プランのもと、フランク・ゲーリー、ノーマン・フォスターらが参加して 2025 年頃まで続く予定という。

ロンドンでの二つの発電所の再生、転用は、都市の近代化を間近で支えながらも、公害を発生させる迷惑施設でもあった巨大建築物を、新たな価値を生み出す遺産に転換する計画として、ブラウンフィールドの再生という観点からも注視されている。

大規模な例

近代には、それまでにない大規模な施設が、都市やその近郊に出現した。すなわち、駅、鉄道施設、工場、倉庫、大病院、監獄等である。近代初頭につくられたこれらの建物は、最初の状態のままで機能を維持するには限界を迎え、解体されたものもあるが、一方で、当時それまでにない規模の投資によって実現した壮大な建築や、都市内の重要な位置にあるものも多く、遺産として再認識される例も多い。これら近代化にともなうつくられた建築物を遺産として見なす動きは、20 世紀終盤から 21 世紀に入って顕著になってきた。それは、近代初頭に設計された交通や生産や流通が過去のものとなり、建物が当初の用途を果たせなくなった時期を示している。そして、近代化遺産はそのスケールが大きいことから、どのように維持、活用するかが、都市的な問題として注目されることになる。

近年の近代化遺産の再生、転用のなかから、不特定多数の利用者を対象にした一般性の高いもので、著名な建築家が参画した物件について、管見の事例を中心に挙げてみよう¹⁵⁾。

1. オルセー美術館 (1986、ガエ・アウレンティ) ← 駅 (1900) (パリ) (図 25, 26, 27)
2. ジェノバ港湾地区の再整備：博物館、図書館、歩行者空間他 (1992、レンゾ・ピアノ) ← 倉庫、産業道路 (20 世紀初頭) (図 28)

¹⁵⁾ 小林克弘、三田村哲哉、橘高義典、鳥海基樹『世界のコンバージョン建築』鹿島出版会、2008 および小林克弘、三田村哲哉、角野渉『建築転生 世界のコンバージョン建築 II』鹿島出版会、2013 を参照。

¹⁴⁾ *ibid.*



図 25 オルセー美術館 (パリ)
近代化遺産の再生、転用の先駆例



図 29 フィアット・リンゴット (トリノ)
長大な旧工場の内部は商業施設等になっている



図 26 オルセー美術館
1900年に建てられた終着駅を同時代の美術館に転用



図 30 フィアット・リンゴット
屋上には旧テストコースがあり会議場が付加された



図 27 オルセー美術館
かつて駅であったことを物語る大時計



図 31 フィアット・リンゴット
屋内端部のスロープはかつての車の生産ライン



図 28 ジェノバ港湾地区の再整備
港湾倉庫を中心にウォーター・フロントを再生した



図 32 ラス・アレーナス (バルセロナ)
闘牛場の外壁を残し商業施設に転化した

3. ガソメーター：商業施設、オフィス、集合住宅 (2001、ジャン・ヌーヴェル、コープ・ヒンメルブラウ他) ←ガスタンク (1899) (ウィーン)
4. フィアット・リンゴット：商業施設、ホテル、見本市会場 (2002、レンゾ・ピアノ) ←自動車工場 (1921) (トリノ) (図 29, 30, 31)
5. ラス・アレーナス：商業施設 (2011、リチャード・ロジャース) ←闘牛場 (1900) (バルセロナ) (図 32)
6. ハイライン：緑地帯 (2014、ディラー・アンド・スコフィディオ他) ←鉄道高架 (1934) (ニューヨーク)
7. エルプ・フィルハーモニー：オーケストラホール (2017、HdeM) ←港湾倉庫 (1966) (ハンブルク)

1は大都市中心部における近代化遺産の再生、転用の先駆けと言えるものである¹⁶⁾。駅であった時代の大時計などが、新築では決して計画されることのない転用ならではの思いがけない光景をつくりだしている。この建物は1900年のパリ万博に合わせて建設されたが、ここで秀逸なのは、その建てられた時代と、印象派を中心とする転用後の展示品が照応していることである。これには同時期に改修が進行していたループル (それまで一部を財務省などが使っていた建物全体を美術館にしてガラスのピラミッドをエントランスとするイオ・ミン・ペイ設計の計画 (1988)) と、展示品を分担することが関係しており、単にひとつの建築プロジェクトのみならず、総合的な文化戦略の中で位置付けられた転用であったことが理解できる。

2では港湾倉庫の転用とともに、港湾地区と市街地とを隔てていた幹線道路を地下化および高架化するなど、建物だけでなく総合的な都市計画が実現している。

3は4基のガスタンクの外壁を残し、内部の巨大空間を大胆に転用したものであり、持て余すほどの巨大エネルギー施設を、都市郊外の再開発に用いた事例である。

4は機能主義の見本としてル・コルビュジェの著作にも取り上げられた自動車工場を再生、転用したものの。かつての生産ラインを示すスロープや屋上のテストコースが残されている。

5は中心市街地に位置するかつての闘牛場を、外壁を残して転用したものの。元々集客施設であったことから、絶好の立地にある。

6は高密度にビルが建ち並ぶマンハッタン島の物流エリアに、線状の緑地帯を出現させた秀逸な再生、転用例。

7はテート・モダンの設計者が手がけた最新のプロジェクト。港湾倉庫であったレンガの建物の上に、ガラスのオーケストラホールを載せるという驚くべき構成となっている。

¹⁶⁾ このことについては、前掲『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』に詳しい。

特徴ある例

上記ほど大規模ではなく建築家も著名ではないが、印象的な再生、転用例を三つ紹介したい。

8. モンテマルティーニ博物館 (1997) ←火力発電所 (1912) (ローマ) (図 33, 34, 35)
9. サラ・ボルサ図書館 (2001) ←証券取引所 (ポローニャ) (図 36, 37, 38)
10. ベルシー・ヴィラージュ：店舗 (2001) ←ワイン倉庫 (19世紀後半) (パリ) (図 39, 40)

8はカピトリノ博物館の分館として古代ローマの彫像やモザイクを納めている。ここで特筆すべきは、発電所のタービンや機器、配管等をそのまま残し、その手前に展示品を一見無造作に並べていることである。近代初頭の機械と古代ローマの彫像という時代も出自も全く異なった物が出会うさまは、常識では思いつかない、まるで夢の中のような不思議な空間をつくりだしている。コーリン・ロウらが『コラージュ・シティ』で述べていたのはこうした光景ではなかったかと思わせる、さすがはローマというべき転用である。

9はポローニャの心臓部に位置するボルサ (証券取引所) を転用した市立図書館である。公共図書館の成功例として知られるこの建物には、一日中多数の市民が出入りしている。彼らはすべてが本を読みに来るわけではなく、館内のバールを利用したり、非常に便利な場所にあることから待ち合わせをしたり、ただ通り抜けるだけの人もいる。こうした人々も含めて利用者とすることで、屋外の広場同様、屋根のある広場としての公共空間が実現している。そこで中心となるのが、かつて立会場であった大きな吹抜とそれに面するギャラリーのあるホールである。図書館機能はこのホールを中心に、吹抜から遠ざかるほど利用が限定された、静かな空間として設計されている。

10はかつてのワイン倉庫群を店舗に転用したものである。この倉庫群のあるベルシーはパリの中でも市街地としての開発が遅れた地区であった。ワインはセーヌ川の水運によって運ばれてきたが、付近には同様に水運や鉄道を利用した物流倉庫などが多く、一般の市民や観光客にはなじみが薄かった。ところが、ここ20年ほどの間にフランス財務省、国立図書館の移転が相次ぎ、地下鉄も開通して新たな商業地区となった。その地下鉄の新駅を出たところにある石造倉庫群を店舗街に再生したのである。

日本での代表例

上記のような近代化遺産の再生、転用例は、枚挙にいとまがないが、日本でも21世紀に入ってから、一般的にも高い注目を浴びる物件が相次いでいる。

11. 横浜赤レンガ倉庫：商業施設 (2002、新居千秋) ←港湾倉庫 (1911、妻木頼黄) (図 41, 42)
12. 国際こども図書館 (2002、安藤忠雄) ←帝国図



図 33 モンテマルティーニ博物館（ローマ）
旧発電所を古代ローマ美術を納める美術館に転用



図 37 サラ・ボルサ図書館
吹抜の大空間は屋根のある広場として使われている



図 34 モンテマルティーニ博物館
発電所施設をそのまま残している



図 38 サラ・ボルサ図書館
吹抜に面したブラウジングの奥に仕切られた閲覧室



図 35 モンテマルティーニ博物館
発電所施設と彫刻が不思議な出会いを遂げている



図 39 ペルシー・ヴィラージュ（パリ）
ワイン倉庫群を連続する店舗として転用



図 36 サラ・ボルサ図書館（ボローニャ）
都市中心部の証券取引所を市立図書館に転用



図 40 ペルシー・ヴィラージュ
一部が地下鉄駅からオフィスへの通り抜け路となる

書館(1908)(図43,44)

13. 東京駅(2014)←(1914、辰野金吾)(図45)

14. 東京中央郵便局:郵便局、商業施設(2014隈研吾他)←(1931、吉田鉄郎)(図46,47)

15. 旧万世橋駅:商業施設(2013)←万世橋駅(1912)(図48)

11は日本での大規模リノベーションの先進的成功例であり、既存市街地からのアクセスを含め、周辺開発とセットにした横浜市の先見性が光っている。

12は日本における一般的な文化財保存とはやや異なる積極的な増築を含む再生で、かつての外壁の外側にガラスの通路部分等を付加することにより、外壁としては問題のある傷んだ壁を内壁に転化する設計がなされている。

13は現役の駅舎であり転用ではないが、外観の復元再生によって新たな創作部分や用途が生まれ、何より日本を代表する建築物の一つであることから、近代化遺産に一般の人々の目を向けさせた波及効果がきわめて大きい。第二次世界大戦の空襲後、応急的に架けた屋根を元のドームに戻し、失われた3階部分を復元した。

14は郵政民営化に伴う政治的な論争にもなったが、文化財の保存としては評価されているとはいえない。しかし転用後の商業施設の内部には、元の建物の裏にあたるラーメン構造が現れ、モダニズムの傑作が新たな価値を付与されたと言える。

15は再開発ビルの建設に合わせ、全く忘れられていた鉄道高架下を商業施設に変えた。川に面する立地条件をよみがえらせ、ほとんど無価値の場所を転換させた。

日本の事例では、耐震性能を確保する必要があるが、これには近年発展した免震化技術が貢献している。

時間がつくる物語

上記で列挙した建築物の立地を見ると、二つの傾向に大別できそうだ。一つは近代初頭における市街地の周縁部である(2,3,4,6,7,8,10,11)。特に港湾、物流、工場地区など、近代になって要請された都市活動を支える場所で、その用途から水際や鉄道敷近くが多い。当初からの操業期間には一般の人があまり出入りしない場所であり、市民にも知られていなかったところもある。多くの場合、大規模な再生、転用によって旧市街とは異なる新しい核を生み出す計画とされる。

もう一つは既存市街地の中心にありながら、大きな面積を占めている場所である(1,5,9,12,13,14,15)。当初からの建物が用途を果たせなくなったり、改修の必要が生じた機会に再生、転用される場合が多く、既存都市に対する再賦活化としての位置付けとなる。

テート・モダンの場合は、基本的に前者だが、潜在的に後者でもあり、アクセス手段としての橋によって

後者の側面が顕在化したと言える。

転用後の用途を見ると、これも二つの傾向に大別できそうだ。一つは博物館、美術館、図書館などの文化施設である(1,2,7,8,9,12)。時間を経た建物と、歴史、文化の展示、啓発には説明不要の親和性があり、新築では生み出せない価値が備わっている。

もう一つは商業施設、ホテルなど、消費を促す施設である(3,4,5,10,11,13,14,15)。転用の前後の差による異化効果を狙っており、これも新築では得られない驚きと楽しみという価値を内在している。日本で進行中の旧奈良監獄の再生では、文化財的価値を保存しながらホテルに転用する計画である。

古い建物の再生、転用では、同じ建物がかつて別の姿、別の用途で存在した事実があり、これは新築とは決定的な違いである。特に近代化遺産では、その差が著しいケースが多い。かつて~であった、そして今は~であるという、時間がつくる物語は、そこでの、その建物にしかないユニークな価値であり、都市の記憶を語ってくれるのである。コーリン・ロウらが『コラージュ・シティ』で述べた、「世の中の余りものに着目し、その元のままの状態を保ちつつそれに品位をあたえ、日常性と思想性とを複合する手法」は、そのまま古い建物の再生、転用に当てはまる。再生、転用という建築的操作によって、異なる形態=時間の共存が生まれ、時間がつくる物語がはじまるのである。

20世紀終盤から21世紀に入って、建物の再生、転用が積極的な建築手法として世界的に注目されるようになった背景には、サステナビリティへの関心が挙げられる。地球環境保全の観点から、建築ができることのひとつに長寿命化があるが、言うまでもなく、建築を長く使うほど生産、解体に要する二酸化炭素の排出は少なくなり、適切な設備、機器の更新を行えば、使用継続することでサステナビリティに貢献できる。

また、近代後半から特に先進国で人口が減少し、新築建物の必要性が低下した。同時に、既存市街地の外に新築建設を行うと、郊外が膨張し都市経営にマイナスが多いことも認識された。そこで、既存市街地の空いた建物に再賦活を行うことが、都市計画の文脈で考えられるようになったのである。再生、転用はいわば縮小、撤退時代の建築方法であり、環境に対する負荷を抑え、産業構造や生活環境の転換で不要になった場所と建物の再編なのだ。そのことを積極的にとらえ、古い建物を都市の資本と考える都市戦略の一環としての遺産の活用が、都市デザインの新しいフェーズとして立ち現れてきたのである。

さらに、モダニズム、ポストモダンを通過し、世界規模で信じられる様式が終わり、今後もそうした様式の出現は考えられない状況で、建築界はもとより、一



図 41 横浜赤レンガ倉庫
最寄駅からのアプローチも含め整備された



図 45 東京駅
ドーム内部は推測によるため現代の材料で創作



図 42 横浜赤レンガ倉庫
海に近い港湾倉庫の特徴がユニークな景観を生む



図 46 東京駅と東京中央郵便局
モダニズムの傑作の上に超高層ビルが載る



図 43 国際こども図書館
旧帝国図書館にガラスの入口を付加



図 47 東京中央郵便局
かつての背面が商業施設の吹抜に面する



図 44 国際こども図書館
旧外壁の外側にガラスの通路を付加



図 48 旧万世橋駅
高架下の忘れられていた水辺空間を再生

般の人々の中にも新しい物つまらない、古い物のほうが面白いという価値観が広まった。日本における古民家再生、町家再生などもこの一脈であり、世界文化遺産をはじめとした観光における文化的、歴史的景観への関心もそれを後押ししている。そして、こうした価値観は、近年ではむしろ若い世代に共有されていると思われる。

4. おわりに：建築を使い続けると

建築を使い続けると、時間の経過がつくる造形ができる。靴底で石が磨かれる。触られて角が落ちて丸くなる。雨が当たって色が変わる。金属が錆びる。木目がやつれ、油分が抜けて枯れる。苔がむす。これらは新築では決して得られない質感である。劣化かもしれないが、風化は建築材料が自然に近づき、なじんでいく過程である¹⁷⁾。たとえ近代以降の工業製品であっても、置かれた場所や使われ方が異なれば、時間の経過したものは、ひとつひとつユニークなものになる。それがその建築物の「かけがえのなさ」をつくる。

建築を使い続けると、整理しきれない遺物が生まれる。役に立たない過去の「変な物」が現在のなかに紛れ込む。意図してはつくれない不整合が生じる。これも新築ではあり得ない。「変な物」は非合理的ではあるが、排除しきれない。あきらめて、折り合いをつけ、ときに楽しむことも文化ではないか。

たぶん、建築材料に現れた時間の経過と遺物の堆積が歴史を目に見えるものにする。ひとつひとつを意識しなくても、時間の経過がつくる造形と遺物がたくさん見えている環境が歴史的環境である。伝統的な都市で受ける「古い」感覚は、これであろう。

歴史が感覚できることは、個人や世代を超えて人間の営為を感じることである。つまり過去から未来へと継続する、社会と公共性を感じることである。そして現在とのギャップに驚いたり、笑ったりすることが、都市の魅力につながるのだと思う。

(写真はすべて筆者撮影)

謝辞：

本稿執筆のきっかけとなったのは関西大学大学院文学研究科での連続講座「都市の風土学」でのひとコマの講義でした。お声をかけていただいた木岡伸夫先生に感謝申し上げます。

¹⁷⁾ 日本の美学は、こうした過程を経たものを、渋い、味がある、寂などと表現してきた。